

「バービー人形における政治的影響」 一頁目…三〇字×十七行×二段（題目と執筆者名で二段抜きで八行分使います）

「塚本美穂」 二頁目以降の本文…三〇字×二十五行×二段

注・文献リスト…三十五字×三〇行×二段

はじめに

マテル社のバービーは世界で最も売れる人形で、二〇一三年の販売収益は、一一・七億ドル（注 1.）であった。バービーは世界で最もよく売られる人形と言われるように、バービーは三秒に一体の割合で売れた。しかし新型コロナウイルスの影響で、二〇二〇年度上半期の収益は四分の一に減り、過去最悪の状況である（注 2.）。

バービーは、一九五九年に米国のルース・ハンドラーが製造したファッションドールで、金髪で青目のすらっとした細身の身体を持つ人形である。人形は、お洒落な衣装を着て、多くのペットと友人に囲まれて、近代的な家に住んでいる。

さらに、世界各国や都市を表す人形や多様な国籍や民族を表す人形と百五十以上の職業、また花をモチーフにした人形や他会社とのコラボ商品、さらに映画やテレビの登場人やセレブをあしらった人形など幅広く製造されてきた。そのような多彩な人形が作られてきてはいるものの、一部の人形は消費者の反感を買って非難を浴びている。そのため商品によつては、回収され、販売停止になってきた。

本発表では政治的影響を受けた人形の身体の記事と、それに対す

る製造会社の反応と対応をみていく。さらにその人形の身体表象が、どのように社会と関わり合い、影響し変容してきたかを明らかにしていきたい。

1. 政治の影響を受けた人形たち

まずバービー人形の表象を、1 身体、2 民族と国籍、3 知性、4 人種、5 衣装の観点から分析しよう。

1 身体

① 一九五九年のオリジナルのバービーと聞いてまず思い浮かべるのは、スリムで美人の人形のイメージである。これはマテル社が人形を売り出すために創造した外見である。人形は、金髪で青目と、細いウエスト、そして長い脚を持つが、そこには女性美に対する憧れと羨望が込められている。

② 刺青バービーのうち、一九九九年の刺青バービーはヒップの上の腰回りに入れ墨が入っている。マテル社の宣伝文句は「入れ

墨を楽しみましょう」(注 3.) というものであったため、世間はマテル社を非難した。身体に傷を入れるという行為がゆゆしいと考えられたためである。また二〇一一年の刺青バービーは、一九九九年の刺青バービーよりも刺青がさらに体全体に広がっている。その刺青の入った身体を見た子どもたちが、「バービーのように刺青できる？」(注 4.)と言ったことから、全米の母親たちから風紀上よくないということで強く非難された。

③ 二〇〇二年の妊娠ミッジは、ふたがついていてお腹の中に赤ちゃんがいる人形である。マテル社は十代の少女たちに妊娠についての知識と育児について知ってもらいたいという思いから、人形を製造した(注 5.)。そして子育てに必要なキットを付属して、出産と育児を、遊びを通して学ぶというコンセプトを明らかにした。しかしバービーの友達のミッジが未婚の母という設定であったため、教育上よくないと考えた全米の母親たちが批判を行ったため、クリスマス前の書き入れ時なのに、米国のウォルマートの棚からミッジは取り下げられてしまった。急ぎよバービーの親友のアランと結婚ということになり、♂の息子ライアンの人形が別売りされることになった。

④ 一九七五年のバービーの妹のスキッパーは、腕を前に回すと身長一インチと胸が伸長する。また腕を後ろに回すと、もとの体型に戻る。マテル社は成長段階について知ってもらいたいという思いからこの人形を製造したが、この成長段階がリアルすぎることで、胸の拡大は性的で教育上よくないということで消費

者の批判を買った。

⑤ 二〇一二年のヨガの先生のバービーは、体の柔らかい長身であるが、バービーの豊かな胸と引き締まったウエストは必要ではないということで批判された。

⑥ 一九九七年の車いすバービーは、バービーの友人ベッキーの人形である。しかし人形の髪が長すぎたために車いすに引っかけたのと、バービー・ドリームハウスに車いすが入らなかったということでクレームがあがった。寸法違いという基本的な機能ミスをしてしまい、予定していたパラリンピック・ベッキーまでの制作には至らなかった。

⑦ 二〇一〇年の髪なしバービーは、治療の副作用で頭髮がなくなった子どもたちのために作られた人形である。髪なしバービーは、二名の母親による署名活動から最終的に十五万人のサポーターによって支持された(注 6.)。マテル社は、長髪でブロンドという人形のトレード・マークを捨てて、髪のないバービーを作って販売したのである。全米の母親たちの要請によって製造されたこの人形をマテル社は全米の病院に寄付した。この商品は市場にも出回り、高い評価を受けている。人形ではあるものの、社会的に影響を与えた。

2 民族・国籍

⑧ 一九七九年のヒスパニック・バービーは、南国の情熱を感じさ

せる真っ赤なバラとロング・スカート、赤と白の衣装を着用している。しかしヒスパニックたちは自分たちの肌の色が人形ほど浅黒くないと考えために、人形の浅黒さが批判された。肌の黒さの濃淡に対して消費者は非常に敏感である。

- ⑨ 国籍についての見解は、一九九五年のメキシカン・バービーから見るができる。このバービーはパーティドレスを身に付けて、ピンクのパスポートと犬のチャウチャウを連れている。このパスポート保有に批判が集まった。なぜなら、米国では、パスポートを持たずに入国するのはメキシコ人であるとみられているからだ。このため、バービーにはパスポートを持ってもらおう、という意図で製造されたとみられた。また服装についても派手で、お祭りタイプのドレスを着ていて、とても旅行者にはみえない、メキシカンに対して固定的な見方をしている、と批判された。ABCに対して、ノートルダム大学のジェーン・ルイス教授は、「メキシコ系アメリカ人は単にカラフルにみられることに飽きている」(注 7.)と述べた。

- ⑩ 二〇〇三年製造のユダヤ・バービーは、肌の露出度が高く風紀を乱すということで、サウジアラビア政府が販売停止した(注 8.)。それは女性のあるべき姿ではないという見解である。西洋諸国では女性のありふれた格好であっても、肌の露出を最小限にする文化圏では、ユダヤ・バービーの露出度は注目される。対策としてマテル社は、体全体を覆う衣装のチャドルを着たバービーのサラを販売した。

知性

- ⑪ 一九九二年製造のティーン・トーク・バービーは、二百七十ものセリフのうちランダムに四語を話す機能的に優れた人形である。そのセリフは、「服は十分あるの」、「ショッピングが好き!」といった米国の消費文化をリードするような発言をする。しかし、「数学の授業は難しい!」というセリフがあったために議論の対象となった(注 9.)。確率的には、人形の一・五パーセントが「数学の授業は難しい!」というセリフを言う可能性があった。全米大学女性協会は、批判の対象の理由を、人形を購入した少女たちが、数学に対する見方が変わるかもしれないという不安と、「数学のクラスは難しい!」と言う人形は子どもの教育上よくないという見解を持った。また米国女性の象徴であるバービーが、数学がわからないような頭が良くないイメージを持てば、全世界が米国女性に持つイメージダウンにもなりかねないという見方があった。このためマテル社は、「数学の授業は難しい!」と言うティーン・トーク・バービーを回収して、このセリフを話さない人形の交換を行った。

人種

- ⑫ 一九六七年の黒人のフランシーは、初のアフリカ系アメリカ人のバービー人形だといわれたものの、従来の白人タイプの人形で、浅黒い肌をもつアフリカ人の特徴がみられなかった。そのため、初のアフリカ系アメリカ人のバービーは一九六八年に生産されたクリステイだと考えられている(注 10.)。

この元祖黒人タイプのフランシーは、一九六〇年代の黒人への反人種差別運動の高まりによって、バービーへの批判の高まりを助長する働きがあったのではないか。なぜなら、一九六〇年代の公民権運動のあおりを受けて肌の色が白いうことで発売停止となったからだ。さらに、マテル社は消費者の批判を受けて、一九六八年に黒人クリステイと一九七九年にヒスパニック・バービーを作ったが、今度は肌の色が濃すぎということで批判を浴びた。

⑬ 一九九七年のオレオ・ファン・バービーは、ナビスコ社と提携したコラボ商品で、「オレオ好きに買ってもらいたい」というキャッチフレーズと、「米国の大好きなクッキー」のコンセプトで売出された。しかし消費者はクッキーという商品ではなく、バービーとオレオの色の組み合わせを想像した。黒と白は肌の色を想像させて、外見の黒さは黒い肌、そして中身は白いために白人文化に浸食されていると捉えたのだ。肌の色の相違によってもたらされる人種的偏見は、バービー研究者ヨナ・マクドローの記述よりわかる。「オレオ・ファン・バービーは、放課後、少女たちが友だちと、『アメリカの大好きなクッキー』を食べながら遊ぶというものだ。販売が軌道に乗ると、マテル社は人形のホワイト・バージョンとブラック・バージョンを製造した。しかしながら、チョコレートをサンドしたオレオ・クッキーの黒い色は、「外見が黒く、内面が白く」人物像を表象するとみられ、アフリカ系アメリカ人が社会を反対した」（注 11）。そのため、黒人バージョンは、オレオが人種を表象すると捉えられたためリコールされ、コーカサイドのオレオ・ファン・バービーは棚から姿を消した。

バービーを巡る消費者と生産者とのいたちごっこの論争でもあるかのように、バービーは進化させた身体をまたもや変えざるを得なくなる。バービーの容姿と肌の色にみられる典型的な容姿と身体は、消費者が望む容貌とは異なるのである。

⑭ そのため、二〇〇九年に黒人バービーのソー・イン・シリーズでは、白すぎず、黒すぎずという微妙な色のバービーが製造されている。にもかかわらず、ストレートヘアよりも三つ編みスタイルやアフロヘアにすべきだったと批判した。明るい目の色よりも、なぜダークブラウンにしないのか。さらに黒さが足りないとと言われて、ヘアスタイル、目の色という点から批判をうけてしまった（注 12）。

5 衣装

⑮ 二〇一一年に販売されたバービー・ベシックスは、二〇一〇年のソー・イン・スタイル・バービーを改善して、十二種類のバービーに肌の微妙な色の濃淡をつけて販売した。人形の肌の色についてはクレームがあったために、実に細やかな配慮を重ねている。それは十二体の人形を一行に並べると、微妙な肌の色で構成されているかわかるからだ。しかし、このうちのバスティ・バービーは、胸の開いたワンピースを着ていたために、ミネソタの主婦アンディ・ホワイターカーがCBSのインタビュウに対して、「娘にはこんな格好をしてほしくない」（注 13）と批判した。

⑯ 二〇一〇年のセクシー・デイズは、メキシコテレビのスポーツ・

リポーターのイネス・サインツを模したバービーである。このバービーは、きらきらのスーツを着ていたが足の露出が多いということで、リポーターの割には衣装がセクシーすぎて、業務ができない、とみられて批判をあびた（注 14）。

⑰ 二〇一二年のドラッグ・クイーンは、ミニドレスを着用して、地面に届くくらいの長さがある人口毛皮を羽織る厚化粧の人形だが、けばい、ということで批判された。

まず人形の身体という点からすると、一九五九年の発売当時、白人の美人であったバービー人形は容姿を変えてきた。一九五九年のブロードで青目の白人から、一九六〇年代の公民権運動を経て、ブラック、ヒスパニック、アジア系、さらにはそれぞれの国や都市をモチーフにした人形が製造されてきた。それ以外にも、映画の登場人物、そして花や食品といったモチーフにした人形という枠組みを取った発想豊かな人形作りを拡大させた。バービーが多国籍の人形を製造していることは意味がある。衣装を着ている人形をみることで、その国の文化、風習、生活習慣を知る上での参考になるし、他国の人々の生活を知り、自分の生活と照らし合わせることができ。その国を表そうとすることは画一的なイメージを与えるが、一方でその国が持つ文化的な背景がバービーを通して表されているといえる。さらに、バービーの身体は消費者の反発を受け、その身体は消費者の望む姿に委ねられて変えられてきた。消費者がバービーに望むのは、米国少女の手本となるモラル的に認められた人形であり、身体は消費者が望む規範的な姿である。

知性と女性の生き方に関していえば、「数学の授業が難しい！」といったバービーは、知性がないと判断されて、商品は回収された。女性の生き方では、ミッジの未婚は望ましくないため、マテル社はミッジのために、夫と子どもつきの家族を作ってしまった。このように社会に与える影響を考慮して、バービーの設定自体を変更してしまった。確かに結婚して家庭を築くというモラルを持つためには、人形が未婚で母子家庭ではよい手本にならない。このように社会にとって望ましくないと判断されると、容易にバービーはその外観を変えるのである。

人種のうち肌の色については一九六〇年のフランシーの登場から常に話題になってきた。肌の色の濃淡は、マテル社が製造時に再三の注意を払っていても、濃すぎる、薄すぎる、こんな色ではない、と常に批判を浴びてきた。これには個人の肌の色のイメージがあるため、すべての人のイメージする色になり得ること自体不可能である。マテル社は二〇一二年にバービー・ベシックという十二体の人形のセットを売り出したが、黄色でも茶色でも微妙に濃淡があり、これなら全く同じではなからうが、近い肌の色のイメージに合ったバービーを設定した。

さらに民族や国籍についていえば、二〇一九年九月にマテル社はメキシコの伝統的な行事である「死者の日」のバービーを発表したが、メキシコ人からは文化の盗用だと非難された。

さらにバービーの黒い身体に関していえば、一九六七年にフランシーが製造されている。

"Colored Francie" made her debut in 1967, and she is

sometimes described as the first African American Barbie doll. However, she was produced using the existing head molds for the white Francie doll and lacked African characteristics other than a dark skin. The first African American doll in the Barbie range is usually regarded as Christie, who made her debut in 1968. (注 14)

「有色のフランシー」は、1967年にデビューを果たし、初のアフリカ系アメリカ人タイプのバービー人形だといわれている。しかし、フランシーは従来の白人タイプの人形で、浅黒い肌をもつアフリカ人の特徴はみられなかったといわれる。そのため、初のアフリカ系アメリカ人タイプのバービー人形は1968年に生産されたクリステイだと考えられている。

一九六〇年代の公民権運動のあおりを受けて肌の色が白いうことで販売停止となり、マテル社は消費者の要望を聞いて、一九六八年に黒人クリステイを作ったが、今度は肌の色が濃すぎということで批判を浴びた。一九九七年のオレオ・バービーに至っては外が黒いクッキーで中が白いクリームは、外見的には黒人であるにもかかわらず、内面は白人文化に侵食されていることを連想させるため大議論となり回収された。

二〇〇九年に一新して、ソー・イン・スタイル・バービーを売り出したが、黒さが足りない、目の色が明るい、ストレートヘアではなくアフロや三つ編みにすべきだと批判を受けた。これに対処すべく二〇一〇年に異なる肌の異なる外見と衣装を身に着けた十二種類

のバービーを発表することによって何かしら議論となり商品の撤収に至り、バービーの評判はガタ落ちで赤字となるため、一度に複数の肌の色を持つバービーの身体を売ることに

よって、消費者の視線を拡散させようとしている。こうしてマテル社は、白色と黒色、そして黄色の肌の色を持つ、例えば「I can be…」バービーを作り続けて対応しているが、この白人、黒人、ヒスパニック、アジア系の四体の人形は、同じ身体を持ち同じ衣装を身に着けた人形で、顔と髪形と肌の色のみを変えている。違う肌の色と顔形、髪形であるとは同じ人形であるため四体すべてを欲しがる消費者はまずいないだろうという想定で、それぞれ別売価格となっている。

地道な努力が功を發したのか、「I can be…」バービーは販売が上々で、マテル社の身体表象が成功だったといえるのではないだろうか。このようにバービーに対する批判は絶えず、常に取り沙汰されるが、その背後には政治的要因と社会的な動向が密接に絡み合っていると

いえる。このようにみえてみると、バービーはその肌の色から衣装や化粧までにわたって、消費者から批判の対象となっている。バービーの身体は追及され、その容姿は米国の少女たちのお手本となる。また世界の民族や国籍を表象する人形に至っては、他民族や相手文化という名目で、多彩な表象を繰り返し、生産を拡大して、消費文化を蔓延させてきたといえる。

- 1 Poulter, Sean. "Barbie given Tattoos by Makers to Mimic High-profile
- 2 Celebrities like Amy Winehouse." *Daily Mail*. June 12, 2012. p. 22.
- 3 Ibid.
- 4 Tsukamoto, Miho. "Idealization of Licca-Chan and Barbie: Comparison
- 5 of Two Dolls across the Pacific. " *International Science Index Vol: 8*
- 6 *No. 9*. International Scholarly and Scientific Research & Innovation.
- 7 pp.3120-3124. September, 2014.
- 8 CBS News. "Mattel to Manufacture Bald Barbie Doll." *CBS*. March 30,
- 9 2012.
- 10 The week. "The Mexican Barbie" and 10 other controversial Barbies.
- 11 " *The Week*. April 12, 2013.
- 12 Roberts, Katie. "Mattel Unveils So in Style Barbie Range. "
- 13 *Intentmedia*. March 18, 2010. p. 21.
- 14 Firestone, David. "While Barbie Talks Tough, G.I. Joe Goes Shopping.
- 15 " *The New York Times*. December 31, 1993. p. 21.
- 16 Sweeney, Kathleen. *Maiden USA: Girl Icons Come of Age* New York:
- 17 Peter Lang Publishing, 2008. p. 82.
- 18 Chapman, Roger. *Culture Wars: An Encyclopedia of Issues, Voices, and*
- 19 *Viewpoints*. New York: M.E. Sharpe, 2009. p. 37.
- 20 McDough, Yona. "Barbie (Doll). " *The New York Times*. August 17,
- 21 2010. p. 18.
- 22 FOX News. "Mattel introduces black Barbies, to mixed reviews. " *Fox*.
- 23 *October 9, 2009*.
- 24 CBS News. "Barbie comments land MN Mom in 'Tonight Show'
- 25 *Monologue*. " *CBS*. May 27, 2010.
- 26 The Week. "The Mexican Barbie" and 10 other controversial Barbies.
- 27 " *The Week*. April 12, 2013.
- 28 Sweeney, Kathleen. *Maiden USA: Girl Icons Come of Age*. New York:
- 29 Peter Lang Publishing, 2008. p. 82.